表1　アルバータ大学の学生構成(1976-1977)

学生総数	19991
学部	17951
大学院	2040
男子	11453
女子	8538
既婚男子	2239
既婚女子	1295

表2　学部別の学生構成

	男子	女子
医学部	600	169
法学部	368	108
工学部	1532	56
理学部	2069	923
教育学部	1305	2895

表3　高年令学生の数（カッコ内は既婚者）

年令	男子	女子
40～45	80(67)	115(88)
46～50	32(22)	53(35)
51～55	10(10)	25(20)
56～60	3(3)	7(4)
61以上	3(3)	2(0)

なるが、カナダやアメリカの大学では、学生たちは入学してからよく勉強するという説がある。日本とカナダの両方での私の経験からは、日本でもカナダでも、勉強する学生はよく勉強し、勉強しない学生は勉強しない、というごく平凡な感想しか浮かばない。ただ、試験の成績の発表の仕方は、日本とカナダで大きな相違がある。カナダでは試験の答案は採点してから学生に返すのが習慣である。コースの最終試験の答案は記録保存の意味で学生に返さないが、要求があれば見せなければならない。化学科の場合は模範解答も発表するので、学生たちは採点された自分の答案を解答と照合したり、友人のものとくらべたりして、教師の採点に不満があれば、文句をつけにやって来る。教師としては応対に時間をとられるし、不愉快なこともあるが、学生との個人的接触のきっかけにもなり、よい習慣だと思っている。

不合格になる学生の割合はコースによってまちまちだが、大学全体の基礎コースの一つである一般化学の講義の場合には、はじめに登録する学生約千五百名のうち三～四割の学生が脱落したり不合格になったりする。カナダの大学では日本の大学にくらべて「学年」の感じがぼんやりしているので、「留年」することの屈辱感も稀薄である。十分よい成績をとっていながら、途中で自ら休学し、旅に出たり、社会に出て働いたりして、また戻ってくる学生も珍しくない。同じような事情が、高校から大学へ進む時点でも生じる。

学生生活あれこれ

一概には云えないが、原則としてはカナダの大学生は親の世話にはあまりならずに生活することになっている。アルバータ大学の授業料は本年度は五六〇ドル、学生ビザしか持たない外国人学生は八六〇ドルとなっている。現在のところ、オンタリオ、ケベック、アルバータの三州がこうした差をつけている。授業料を払ったあとの生活費月額はかなり切りつめて二五〇ドル見当。カナダの法定の最低賃金は一時間三ドル余りで、学生の夏の臨時職は低賃金のものが多いので、夏の四ヵ月で一年間の大学生活の費用を稼ぐのは必ずしも容易ではない。しかも、学生ビザでは仕事にはつけないので、外国人学生を取巻く状況にはきびしいものがある。カナダの連邦政府から年額千五百ドルあたりまで学費の借金をする手もあるが、これも学生ビザでは駄目。もっと

授業風景

も大学院学生の場合には、講義の手伝いをするティーチング・アシスタントの仕事をすることで、年額六千ドル前後の収入を得ることができる。これは学生ビザでもできる。

アルバータ大学の学生の構成についての統計を少し表にしてみた。表1を見ると、男女学生の比は大体六対四で、これはカナダの大学全般にあてはまる数字である。表2には、いくつかの学部別の男女学生の数を示してあるが、日本の場合とくらべると、カナダと日本の社会的相違の反映を読みとれるかもしれない。同じ意味で、表3は興味深い。カナダの大学には高年令の学生の数が日本より断然多いと思われる。これは直接には入学試験がないことの結果ともいえる。もっと根本的には、教育あるいは物を学ぶということが人間一生の事業だという考えの現われと見るべきだろう。こうした考えは、アルバータ大学の公開成人講座の充実ぶりにもうかがえる。常時七〇人ほどの専従スタッフが一つの大きな建物を占有してその運営にあたり、大学の果す社会的機能の重要な一翼をになっている。

中央図書館

アルバータ大学の中央図書館は二つの大きな建物を占め、蔵書数約百万、特殊な図書を除けば全面的に開架方式になっている。人びとは勝手に棚から本を探し出してきて、気持のよい読書をたのしめるわけである。入館の際には何のチェックもないので、ただ入ってその場で読んだり、しらべものをするだけであれば、大学とは何の関係もない、外部の誰にでも利用できる。日本の大学図書館とは大変な違いである。聞くところによれば、紛失する図書の数は、じつは少なくはないとのことであるが、それにもかかわらず、

学生会館▶